

皆様おはようございます。この土日は天気予報の通り非常に寒い天気となりました。一面の雪景色となりました。朝はマイナス6度位です。寒い盛りですが、寒さも今月いっぱいの辛抱。3月になれば春の足音が聞こえてくるように思います。只今はヨハネ福音書を読み進めております。5章ではベトザタの池でのいやしの記事が記されておりました。

38年病の中にいた人に対して、安息日の次の日になるまで待つて癒せば問題なかったにもかかわらず、38年待つていたこの人に対して、明日まで待つてということがあるだろうか。今日癒してあげたいんだと、イエス様は思われました。

「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」とかたられました。神様を休むことなく私たちの救いのために働き続けていて下さいます。とてもありがたい御言葉です。胸が熱くなります。

そして今日は6章に入ります。イエス様はガリラヤ湖を渡って向こう岸に行かれました。そこにも、湖の向こう側にも大勢の群衆がいて、イエス様について行きました。イエス様が病人たちになさったしるしは多くの人に目撃され、そしてまた伝え聞かれる所となっておりました。

イエス様が山に登りお座りになると山の上の方から、山の向こう側から人がまたイエス様を追いかけてやってきました。山の中で皆お腹ペコペコになろうとも、イエス様に出会うためにやってきて、クタクタになろうとも、その所から離れようとしませんでした。そこには人々の切実な悩みがありました。イエス様に聞いていただかなければ、他ではどうにも立ち行かない、イエス様でしか助けることのできない深い問題がありました。その人たちをじっとご覧になって、そしてイエス様フィリポに言いました。「この人たちに食べさせるにはどこでパンを買えば良いだろうか。」

男性だけで5000人。女性を入れれば一万人いたことでしょう。一万人と簡単に言いましても、それは非常に多い大きな群衆でした。1クラス40人としても10,000人÷40=250。1クラス40人でも250クラス編成の学校です。小学校6学年に分けても1学年42クラスです。1年1組から42組なんて言うマンモス校は見たことがありません。その各学年42学級に40人がぎっしり入ったクラスが6学年で一万人。

その山の真ん中の所で。山の中のその場所はそのような大勢の群衆を擁する場所となっておりました。この人たちを食べさせるにはどこでパンを買えば良いだろうか。今日庄原市を駆け回っても一万個のパンを手に入れる事は出来ないと思います。1人100円のパンを買っても一万人で百万円。200円分買ってもに二百万円。そしてパンを売る店もなくこの人たちを食べさせるにはどこでパンを買えば良いだろうか。どこでもそんなたくさんのパンは売ってはおりませんしそれを買うだけの財力がありません。そう答えるしかないであろうと思うの

ですけども、6節にありますように、これはフィリポを試みるためであって、ご自分では何をしようとしているか知っておられたとのことですよ。

フィリポをテストするためイエス様は、そうすることが人の力では出来ないということが分かった上でイエス様はフィリポをテストするため、試みるために語られました。出来もしないことをやれと命じるのはかわいそうじゃないか、意地悪じゃないかと思われるかもしれません。

しかし逆に捉えれば、人にはできないことをも神様にはできるということなのですね。人にはお手上げであることも神にはできるという事ですが、イエス様は神様でいらっしゃるのだから、奇跡でもなんでも難なく当たり前で私たちが考えがちなのではないのでしょうか。

イエス様は神様です。しかしそうであると同時に、私たち全く同じ人間としてここに立っておられました。40日間何も食わず試練をお受けになった時もイエス様はご自分のために石をパンになさる事はありませんでした。本当に私たちと変わらない人として進まれ、そして人として信仰を持って進まれました。弱い人間であっても、信仰に生きれば罪を犯さずに聖霊によって正しい祈りをささげ、神様の前に義と生きることができるということをイエス様は示してくださいました。しかしできる道が開かれても、聖霊が与えられても、私たちは罪を犯してしまいます。そのためにイエス様は身代わりとなって贖いとなって下さいました。模範として、身代わりとして、赦されてイエス様に近づく道が開かれています。ですから、イエス様は神様だからこの奇跡をやすやすとおできになったと言う風には考えないようにしたいと思います。

イエス様も一人の人としてその弱さも限界もご存知の上で、しかし私たち人間にはできないことも、神様にはできるという、その信仰で祈って自らの力ではなく神様に祈り神様の御業の中でこれらの聖書の出来事を私たちにを見せてくださったと、そのように私たちが信じたいと思います。

フィリポを試みるため、テストするためという事は、フィリポにとってどうひっくり返しても不可能なばかりであれば、答えのない問題を出されるという事になってしまうわけですから、これはフィリポが決してできないわけでは無いテストであったと考えられるわけです。あくまでも、ここで飢え乾いた人たちを置き去りにはなさない神様の御心を信じて、神様に頼り、信じ切っていれば御業を仰ぐと信じ切っていれば、フィリポもまた神様のご栄光を見ることが出来たのでした。そしてイエス様は、その父なる神様の御心を信じ切っていました。

ヨハネ 14:11 わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。

14:12 はっきり言うておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。

14:13 わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。

14:14 わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」

『ジョージ・ミュラー (George Muller) という 1800 年代に存在したあるクリスチャンについてご存じですか。

プロシア (現ドイツ) で生まれたジョージは、父が弁護士という大変裕福な家庭で育ちました。甘やかされて育ち、若い時から飲酒やギャンブル、窃盗を繰り返し、16 歳の時にはホテル代金を支払わずに刑務所へ行くなど、かなりの問題児でした。

そんなジョージは、よいキャリアを確保する為だけに行った大学時代に友人たちと旅行で訪れたスイスで、ある人に聖書の勉強会に誘われます。

そこで今までに経験した事のない程の喜びを感じ、イエスに自分を捧げる決意をします。

生まれ変わったジョージは、今までの素行をきっぱりとやめ、聖書以外の本は全て処分しました。

イエスの為に生きることを決めたジョージは、宣教者となる為ロンドンへと渡り、宣教を始めます。

数年後、当時流行っていたコレラが悪化した影響で、多くの孤児が出ているのを目撃し、ジョージは孤児院を開くことを決意します。

神の賛同もあり、ジョージの計画は着々と進みました。

ジョージは資金繰りの際、寄付を頼むことも、借金をすることも一切ありませんでした。

神だけを信頼し、祈りを通して神に全てを委ねたのです。

神はジョージの祈り通り、運営資金などの必要なものは全て与え、ジョージは無事に孤児院を開くことができました。

しかし、だからと言って常に運営資金が十分にあるわけではありませんでした。ある日、書斎にいたジョージのところに妻メアリーがやってきて、こう告げました。

「明日の朝、子供達に出す牛乳がまったくありません。」

ジョージはメアリーに、

「一緒に祈ろう。」と言い、他にいた人たちも一緒に祈り始めました。

するとそのわずか数分後、誰かがドアをノックし、一通の封筒を届けに来ました。開けてみると、そこにはお金が入っていました。

それから数分後、さらに2通、同じような封筒が届きました。

その額は、子供達の牛乳を購入するのに十分でした。

また別の日の朝、世話人の女性がジョージにこう言いました。

「子供達は既に学校に行く準備ができていますが、食べ物が全くありません。」

その子供たちの数は300人でした。

ジョージは彼女に、子供たちを食堂に連れて行って座らせるように言いました。

この食堂でジョージは、食べ物などないのに、あたかも食べ物が与えられたかのように神に恵みを感謝し、じっと待ちました。

この感謝の祈りからほんの数分後、近所のパン屋さんがやってきました。聞けば、前夜眠れなかったのでパンを焼き、孤児院が必要ではないかと思って持ってきたのです。

さらにその直後、今度は牛乳配達人がやってきました。

孤児院の前で配達用のカートが故障し、直すまで放っておくと牛乳が腐ってしまうので、差し上げます、と言うのです。

パンも牛乳も、300人の子供達全員に行き渡りました。

これらの奇跡のような話は、一度二度ではなく、何度も起こったと言います。

ジョージは生涯合計5つの孤児院を開きましたが、最初の孤児院同様に、ただの一度も寄付をお願いしに歩き回ることも、借金をすることもなかったそうで

す。

ジョージは、

「神と共に歩み、常に神に目を向け、神が助けてくれると信じなさい。神は決して裏切りません。」

と、神の助けを少したりとも疑いませんでした。

ジョージが全てを捧げて仕えた主であるイエスは、

「何でも祈り求めることは、既に叶えられたと信じなさい。そうすれば、その通りになるであろう。」(マルコ 11:24)

と言います。

そんなイエスはガリラヤの海辺で、7つのパンと小さな魚しかなかったのに、イエスに病気を治してもらう為についてきた群衆全員に十分な食べ物を与えました。そこには4000人の男性の他、女性と子供も大勢いたとされています。(マタイ 15:32-39)

また別の日には、大麦のパン5つと魚2匹で、イエスについてきた5000人以上を超える群衆みんなが満腹になるほどの食べ物を与えました。(ヨハネ 6:1-13)

神であるイエスに、不可能なことなどないのです。

そしてジョージは、まさにイエスが望む通りに祈ったのです。

これほどまでに強い信仰の道を歩み続けたジョージは、70歳の時、孤児院の運営を娘夫婦に任せて、世界中で宣教を始めます。

そこから17年間、ジョージは日本も含め42か国で宣教活動を行いました。

またジョージは、クリスチャンではない人への宣教以外にも、クリスチャンに聖書を愛すること、そして、全てを神の言葉と照らし合わせて事実確認をすることの大切さも説きました。

神であるイエスに全てを委ね、イエスの為だけに生きたジョージは、92歳でイエスのもとへと行きました。』(ブログ 死ぬまでに必ず知っておくべきこと - JESUS より転載)

イエス様のこの、一万人を養ってくださいとの祈りもまた、信仰から出た、父なる神様の御心に沿った祈りでした。そして祈りが聞かれる様を人々が見て、イエス様をお遣わしになられた神様があがめられ、同じように祈る祈り手が生まれるように。

6 こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとし

ているか知っておられたのである。

これが「御自分では何をしようとしているか知っておられた」との意味です。「知っておられた」という言葉は、ギリシャ語では珍しい大過去という用法の言葉が記してあります。

私が勝手ながら解釈するならばもう昔、昔から既にもう決めておられた、知っておられたと言う意味かもしれません。人がどうであろうとどんなに弱くそろばん感情が先に立って、目に見える前の目の前の状況を把握することには非常に長けていて、そしてすぐにその計算結果に基づいて不可能だ判断するという結果を生み出す。それが人間の限界である弱さであるということを重々知っておられその上で、ご自分は父なる神様に信じ抜いて祈って、このパンの奇跡が起こされるという事は、神様の恵みのうちに、明々白々に、古来からの真実として、変わらない真理としてイエス様は知り抜いておられた。信じ抜いておられた、はっきりと確信しておられたという事でしょうか。そのようにイエス様は疑うことなく、神様の恵みの憐れみの御心のうちに、ご自分がこれから何をしようとしているか知っておられたのです。そして父なる神様はその祈りに答えて、弟子たち嬉々としてパンを配ってそしてこの青草の茂ったこのふかふかの青空レストランにて、イエス様は羊飼いとしてみんなの世話をなさる。そのことをイエスは確信しておられました。

7 フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。

めいめいが少しずつ食べるためにも 200 デナリ分のパンでは足りないでしょうと答えました。1 デナリは1人の労働者の1日のお給金です。それが200人分の給金ですから、1人5000円とすれば百万円1人一日一万円とすれば二百万円です。一万人の人ですから、一人百円のパンでも百万円、一人二百円であれば二百万円かかるという事です。フィリポは非常に現実的な算盤勘定を弾きました。

8 節 弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。

9 節 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」

少年1人のお弁当、小さなパン5つそして干したような魚2匹、これが1人の少年のお弁当であったわけですが、一万人がいるのに子供1人分のお弁当があっても何の役に立も立たないと、私たちは確かにそう思うのです。役に立たないのにどうするのか。しかしここにいる少年が自分のお弁当をみんなのために差し出しているっていうのも美しいなあと思います。他に多少の食べ物を持って人がいたかもしれませんが、誰かたくさん持ってる人がいたら分けて

くれないかって言った時に、真っ先に少年が手を挙げたのでしょうか。僕のお弁当をどうか分けてあげてくださいと言ったのでしょうか。大人であればそんな自分 1 人の弁当を出したところでどうなるかと思って手を上げないのですが、子供は優しい心があって、そしてイエス様に差し出したらあるいは良いようにしてくださるといふ信仰を持っていたのかもしれない。

いずれにせよこの差し出す少年の心の優しさが現れています。アンデレはこの少年の心を踏みにじることは出来ず、イエス様、こんな少年がいますけれどもどうにもなりませんよね。この子の顔を立てて申し上げるんですけどどうにもなりませんよね。大変失礼をいたしましたと、恐縮するのです。

しかしイエス様は人々を座らせなさいと語られます。イエス様にはそれで十分なのです。

そこには草がたくさん生えていました。ふかふかした柔らかいその草のところに男たちが座り、その数はおよそ五千人。女性も子供もいたことでしょうか、この青空レストランのところに一万人のお客さんがやってきてイエス様は彼らをもてなされたのです。

座って一休みなさい、そしてイエス様は 5 つのパンを取り感謝の祈りを唱えられました。その祈りの言葉はここに記してありませんが、主なる神様への信頼あふれる祈りであったに違いありません。それは感謝の祈りでした。

フィリピの手紙の 4 章 6 節からはこう書いてあります。4:6 どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

4:7 そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

キリストイエスをお与えになるほどに愛して下さった神様に私たちが祈る事は、愛してください、助けてください、あなたは分かっているのでしょうか、ちゃんと見ておられるのでしょうか、心配です。悩んでいます、あなたはどこにおられるんですか、という祈りではなくて、「感謝しますあなたがイエス様を賜りそして私たちのことを生涯において守り、永久にあなたの身許で住むことを許して導いてくださり、感謝します。」という祈りです。そして私たちに必要なものをあなたは全て知っておられます。空の鳥を見、一輪の花を見る時、私たちによくして下さらないことがありますでしょうか。神様あなたに感謝をささげ、あなたに願い事を知っていただきたいと思えます。それが私たちの喜び溢れる祈りです。

手探りをして、迷い歩き、どこに答えがわかるあるかわからない空に向かって叫

ぶような独り言ではなく、私たちのために両手を広げ待っていてくださる方に、その輝く笑顔の方に向かってありがとうございます、あなたは全てをご存知ですと、感謝することから私たちは祈りを始めることができる。そのことを心から感謝したいと思います。

そしてイエス様はパンを取り感謝の祈りを唱えてから座っている人々に分け与えられました。

面白いことに、この「座っている」という言葉はギリシャ語では「テーブルに座っている夕食のゲストとしてそこにいる」というそんなニュアンスのある言葉です。イエス様はそのようにテーブルに座っている夕食のゲスト招待されたお客様たちにもてなすようにふくさがたくさん生えているふかふかの座るところで人々を休ませそして食べ物に秋足りるまで預らせてくださる魅力的な素晴らしい仕える私たちがホストでいらっしゃると言うことを覚えます。

魚も同じようにして感謝の祈りを唱え配り、欲しいだけ分け与えられました。みんな申し訳ないって思って我慢して少しのものを分けたというわけではありません。欲しいだけ分け与えられたのです。満腹になるまで食べたのです。主の温かい笑顔の中羊飼いの温かい笑顔の中、もてなしの中、一万人の人たちの喜び溢れる食事の時が始まりました。

人々は満腹しました。

イエス様は弟子たちに、少しも無駄にならないように残ったパンのクズを集めなさいと語られました。一万人の人が満腹して食べるだけ食べたからもうパンくずは要らないと、捨てておきなさいと言うことではなくて、大事に大事に神様が与えて下さったパンくずを集めなさい語られ、集める 5 つの大麥パンを食べて残ったパンのくずで 12 の籠がいっぱいになったという事です。本当に私たちの常識では考え知れないことがそこに起こりました。

12 の籠にはいっぱいパンくず。まだまだ、まだまだたくさんの方がそこに招待されることができたのです。そのテーブルにはまだ空きがあったということがわかります。

12 の籠。12 というのは完全数であるとしばしば言われます。主の給食にまだ空き席があります。私たちは主の緑の牧場に伏させていただく羊となりました。日々この所から人知を超えた方法で養いをいただき喜びをいただき幸せをいただいで満ち足りています。満腹しています。しかしそこにはまだ 12 の籠にいっぱいになっている人たちの糧が余っており、それを祝福の内に食べる人を待っています。私たちはテーブルにどうぞお掛け下さい、そして満腹するまで召し上がってくださいと、共に食卓を囲む友をお連れしたいと願います。人々はイエスのなさったしるしを見て、まさにこの人こそ世にに來られる預言者であると語



りました。しかし自分を王にするため担ぎ上げ、そしてそのようなお祭り騒ぎになることを察したイエス様でした。この方を王として、新しい国を作るんだ。この国には何の不自由もなく空腹もなく悩みもなく力強く、世界に君臨する。覇権を得る。その国を建設するんだと息まきました。

イエス様は地上では仕える方。時は過越しの祭りの近くでした。イエス様はその過越しの祭りの羊の血のいけにえとなるべくこの地上に来ておられたのです。

王として祭り上げられるためではなく、ご自分の血潮を注いで身代わりのいけにえとなるために。過越しのいけにえとなり、そして来るべきさばきから人々を救うために、鴨居に塗られる血潮を流すためにイエス様は来られました。

王として担ぎ上げられることなく、イエス様はどこまでもしなる神様の御心を中心として進まれました。

遣わされた方の御心を行うこれが私の糧である食物であると。そのようにしてイエス様は進んでいました。

そしてイエス様はスーパーマン、神様だからやすやすとこのことを自分の力でしたのだと言うふうに私たちは思わず、私たちを試み信仰のテストしてらっしゃるイエス様は、今日も「この人たちに食べさせるにはどこでパンを買えば良いだろうか」、あなた方に養ってほしいのだと語りかけられます。

マタイ 14:13 イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。

14:14 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。

14:15 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買に行きましょう。」

14:16 イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」

私たちに語りかける声をお聞きするときに、私たちは自分自身の力を見ることなく、可能性を見ることなく、神様を見上げたいのです。「私たちにはできません。しかし感謝します、あなたはこの飢え渴いた、悩みを中にある方々をもてなしたい、救いたい、助けたいと思っておられ、それを私たちに託してくださったんですね。あなたがそれを私たちの使命として私たちを遣わして下さるなら、あなたのゆえに私たちはできる。あなたの御力で私たちはできる。感謝します。祈ります。目の前にいるこの方々はあなたの御手に委ねます。私たちにはで

きませんどうか養ってください。満たしてください。」と、私たちもまたそのようにイエス様からの信仰のテストに答え答案を出そうではありませんか。

「めいめい少しずつ食べるにも 200 デナリ分のパンでは足りないでしょう。少年が小さなお弁当を持っていますがこんなものにはどうにもなりません」と言うことではなく、神様は私の持っている者は小さくても、しかしあなたにおささげします。あなたは私たちという存在を喜んで受け入れて、握りしめて祝福し、そして一万人の人を養ってくださいます。そのために私をあなたに捧げます。そして私の祈りを通してあなたがこの目の前にいる一万人の人にあなたの御力を表してください。あなたが父なる神の許からこられた方であることをどうか私たちも証することができるように。そしてイエス様が確かに私なる神から来られた救い主であり、この方の御声に聞き従うものは救われ永遠の命を持つことができるという事を信じることができるように、私たちに証をさせてくださいと祈りながら今週も進ませてもらいたいと願います。